CESレポート

# CES2020/ユーレカパークの各国の状況とJAPAN TECH PROJECT

株式会社クリエイティヴ・ヴィジョン　代表取締役　加藤（かとう）　浄海（きよみ）

## 1. はじめに

ITUジャーナル読者の皆様こんにちは。

今回はCES2020における各国の出展状況や、スタートアップ企業の出展が集まるユーレカパークでのジャパンテックプロジェクトの仕掛けと、ベンチャー企業と大手企業のマッチングに付いて寄稿させていただくこととしたい。

当社は、アメリカを中心に海外の展示会に出展する日本企業の出展のサポートサービスの提供を行っており、CESにおいては開催事務局であるCTA認定の日本で唯一の販売代理店として活動を行っている（図1参照）。

■図1. 代理店認定証

また、CESのユーレカパークにおいてジャパンテックプロジェクトという名称のジャパンパビリオンの企画から運営までをプロデュースしており、今回は今までCESに携わってプロジェクトを実行してきた観点から寄稿させていただいている。

## 2. CES2020

CESは1967年にニューヨークで初めて開催され、元々は家電の見本市であった。現在は1月の2週目に開催することが定例であるが、以前は年に2回、夏と冬に開催されていた。

一般的な家電の多くはCESで発表され市場に出て行き、2000年以降、家電がインターネットとつながり、現在のCESはIoT（Internet of Things）を中心とした世界最大の未来を発表する展示会へと変貌した。

**【各国の様子】**

CES中でも圧倒的な集客力と人気を誇る会場がユーレカパークである。

ユーレカパーク自体は2014年からでき始め、その時はまだ20社程度の小さなカテゴリーだったが、2017年前後から一気に拡大し始め、現在は1,200社が出展する大きなカテゴリーに成長した。

ユーレカパークの出展対象はスタートアップ企業に限定されており、現在はフランスを中心に世界中からスタートアップ企業を集めた各国のパビリオンが形成され、万国博覧会のような状況である。

圧倒的な大きさと影響力を誇るのはフランスだが、オランダ、イタリア、スイス、イギリス、ドイツ、イスラエル、タイ、香港、台湾、韓国、中国など各国が力を入れて自国のスタートアップ企業をCESに送り出している。

アジア勢の中で一番力を入れている国は韓国で、国と企業（サムスン電子）が一緒に大学生のスタートアップを大量にCESに送り込み、韓国自体が国を挙げてエレクトロニクス業界のボトムアップを図っていることが分かる。

世界から46か国がユーレカパークに参加し、国を掲げてスタートアップ企業を後押ししているので、CESの中でも爆発的に成長したカテゴリーとなった。

■図2. ユーレカパークの賑わい①

■図3. ユーレカパークの賑わい②

■図4. ユーレカパークの賑わい③

■図5. ユーレカパーク全体

ユーレカパーク自体は出展企業が毎年増えている右肩上がりの状態で、CES2020全体の来場者数はCES2019に比べると少し減少したが、ユーレカパークへの出展企業数と注目度は上がっている状態である。

注目の理由は、スタートアップ企業の作り出す製品が大企業にはない個性的なアイディアや大企業にはないスピードの速さなどの魅力が集客力の強さになっていると考えられる。

【ジャパンテックプロジェクトの仕掛け】

我々が企画しているジャパンテックプロジェクトの企画の発端は、私自身がCESに参加している時にCESにジャパンパビリオンがなかったことと、日本のスタートアップ企業の出展できる場所がなかったことと、大きな時代の変化をCESに感じたことが企画の発端となった。

『日本のスタートアップ企業が世界へ挑戦できる場の提供』が日本のエレクトロニクス業界の底上げに必要と考え、

2015年から企画をスタートさせ、2017年から実行しており、CES2020で4度目の実施となる。

ジャパンテックプロジェクトから出展したスタートアップ企業は、経済産業省のJ-STARTUPから出展されないスタートアップ企業や、大手の日本企業の社内ベンチャー企業、大学のベンチャー企業などが参加している。

**【ベンチャー企業と大手企業のマッチング】**

当社はCESの代理店を務めており、CESに出展される日本企業とも関係性が有るので、ジャパンテックプロジェクトにおいてベンチャー企業と大手企業（日本企業）とのマッチングも積極的に行っている。

当社でCESへの出展のサポートサービスの提供を行っている日本企業と、ジャパンテックプロジェクトから出展されるベンチャー企業とをつなぎ、相乗効果が出るように、お互いのCESの出展効果が高まるように進めている。

実際に日本国内ではつながれない方々とCESでつながり、ビジネスが成長しているスタートアップの出展企業もいるので、実質的に効果があると考えられる。

これからもCESにおいてジャパンテックプロジェクトを継続していき、日本企業が世界へ進出して行くための登竜門として位置付け、ビジネスにつながるプロジェクト、大きなブレイクスルーのきっかけになれるプロジェクトとして運営していく。

■図6. ジャパンテックプロジェクト集合写真